

「多文化社会とコミュニケーション」愛知県立大学（2020年度）

第4回「多数派には名前がない—関係の非対称性について」

あべ やすし abeyasusi@gmail.com

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2020/>

今回は多文化主義の理念について確認したうえで、差別とはなにかを考える。

今回、共通の問題としてあるのが、「カテゴリー」をどのようにとらえるのか、という問いである。

「多文化」が政策になるとき—多文化主義をめぐる

カナダやオーストラリアなどでは、国の政策として「多文化主義」をかかげている。日本はそのような政策をうちだす状況にはなっていない。多文化と名のつく法律もない。しかし、日本も国連の国際人権規約や子どもの権利条約、人種差別撤廃条約などを批准している以上、「国際人権」という視点から社会を再統合するという課題を無視することはできない。そこで、多文化主義政策をめぐる議論について、おさえておく必要がある。

宮島喬（みやじま・たかし）は、『多文化であることとは』で、欧米諸国でゆるやかに共有されている多文化主義の定義をつぎのように説明している。

主流文化とは異なる文化特性をもつ人々の集団にとり、その文化は彼らの生き方を意味付け、支える重要な意味をもつのである以上、文化的差異を棄てさせるのではなく、許容する、すなわちその差異の保持、表出、伝達（教育）の権利を認める、という確認がそれである（みやじま2014:27-28）。

ひじょうに大事なポイントであるが、それを実践するとなると、べつの問いに直面することになる。鄭暎恵（ちよん・よんへ）は多文化主義（マルチカルチュラリズム）の「可能性と困難」について議論するなかで、つぎのように多文化主義の問題点を指摘している。

まず、最初にあげられるのは、マルチカルチュラリズムを導入することで生じる、諸文化のステレオタイプ化という問題である。相互理解が可能となるよう、文化を規格化する問題といいかえてもいい。また、そうして規格化された文化を「尊重する」という名目で、「保存を義務化」することの弊害がある。本来、マルチカルチュラリズムは自文化に対して自己決定権を保障するために導入されたはずなのだが、ステレオタイプ化／規格化／保存の義務化というプロセスにはまった途端、本末転倒していく。他者化され、外から規定されることで、文化は内からわき出る生命力を失う。文化とは、ある人々がともにその風土の中で生き延びる（サヴァイヴ）ために編みだした生活様式だったのだから、状況に応じて当然変化するはずであった。が、マルチカルチュラリズムを通じた途端、文化は「博物館」に陳列され、他者の賛辞は受けるかもしれないが〈見られる／記述される／評価される対象物〉となる。マルチカルチュラリズムの中で尊重されるべき文化かどうか、査定される必然性が生じるからだ。誰の目にも留まらない文化は、そもそも文化の一つとして数えられることもない。

つまり、マルチカルチュラリズムは「文化は分類することが可能だ」という前提に基づいているわけだ。が、文化を分類するのはいったい誰なのか（ちよん2003:224）。

多文化主義を政策にかかげるならば、文化を査定し、分類し、そのうえで尊重するという状況が生じる。そこでは文化は固定的にとらえられ、状況に応じて変化するような生命力をうしなってしまう。文化をパッケージ化して、わかりやすく提示することで国家の承認をえるというような多文化主義では、文化は「見いだす」ものではなく、「規定されるもの」になってしまう。文化は、固定的なものではない。流動的なものである。はっきりと境界線をさだめることができるものでもない。複合的なものである。しかし、たとえば教育の分野でどのような文化や歴史をとりあげるのか（カリキュラム）をきめるとき、どこかに焦点をあて、きり取る以外に方法はない。どこかで本質化することはさけられないということだ。それなら、どうすればいいのか。

ふたつの「ちがい」、ふたつの権利（社会権と自由権）

ここで「多文化共生センターきょうと」のキャッチコピーに注目したい。このグループは阪神大震災のときに設立された「多文化共生センター」の京都支部として出発し、のちに独立した。現在は医療通訳などにとりくんでいる。

多文化共生センターきょうとの基本理念は、以下のふたつである。

あってはならないちがいをなくす
なくてはならないちがいを尊重する

あってはならないちがいとは、権利をめぐるちがいである。不平等や差別をなくすということだ（社会権）。そして、なくてはならないちがいとは、文化の多様性ということである。それはつまり、マイノリティに対する同化主義をやめるということだ（自由権）。多文化共生センターきょうとのサイトでは、つぎのように説明している。

国籍やことばによる「ちがい」による格差と排除（情報の格差、社会保障の制限・差別や偏見）をなくし基本的
人権の保障を求めると同時にそれぞれの文化背景やアイデンティティなどの「ちがい」を認め尊重する ([http://
www.tabunkakyoto.org/about-us/](http://www.tabunkakyoto.org/about-us/))。

「国籍やことばによる「ちがい」による格差と排除」とは、どのような状況をさすのだろうか。「ちがい」を認め
尊重する」とは、具体的にはどのようにすることだろうか。文化という概念だけで説明（解決）できることではない。
人権とはなにか、それを保障するための政策はどのようにあるべきかという議論が必要である。

差別ってなんだろう

多文化主義という理念は、ことばをかえれば、「差異の権利」と「反差別」ということだ。それでは、差別とは、いつ
たい、どのようなことをさすのか。佐藤裕（さとう・ゆたか）は差別をつぎのように定義している。

差別行為とは、ある基準を持ち込むことによって、ある人（々）を同化するとともに、別のある人（々）を他
者化し、見下す行為である（さとう2005:65）。

これはたとえば、「変なやつがいるぞ!」と指さし、仲間や周囲の人々によびかけるといふ状況をイメージしてほしい。
そのとき、呼びかけた本人と周囲の人たちは、名前のない「われわれ」になる（同化）。このとき、その「われわれ」
は自分たちを「ふつうの人」と規定している。そして、「変なやつ」と規定した人に、悪意をこめた名前をつける（他者
化と見下し）。どのような人が「変なやつ」と指さされるか、わからないということがポイントである。

悪意をこめた名前というのは、たとえば「つんぼ」という差別語がある。自称としては、ろう者という表現が使用さ
れている。マイノリティの名称には、他称と自称が同一の場合と、ちがう場合がある。マイノリティのなかでも、それぞ
れべつの自称をえらんでいる場合もある。「クィア」のように、差別的なまなざしがこめられた他称を自分たち（性的
マイノリティ）の自称として、あえて選択する場合もある。「クィア（queer）」というのは、「ふつうではない」とい
うニュアンスがあり、「変態」くらいの意味である。「そうですよ、ふつうじゃありませんよ」「ふつうって、なんなん
ですか?」という態度表明をこめているといえる。呼称やアイデンティティをめぐる問題は、多文化社会の重要な論点であ
るといえる。

差別のもうひとつの問題は、態度や発言などのコミュニケーションの問題にとどまらず、社会の制度にかかわること
である。国籍や性別、身体などによって利用や参加を制限することについて、それぞれの是非を検討するというこ
とも、多文化社会の重要な課題であるといえる。

関係の非対称性について一多数派には名前がない（多数派は名前をしらない）。

差別について考えるとき、重要なのは、関係の非対称性に注目することである。差別は、権力関係によるものだから
だ。ここで、「関係の非対称性」とはどのような意味なのかを確認してみよう。

たとえば、女医であるとか、女性総理ということばがある。一方で、男性の医者や総理大臣を、男医であるとか、男
性総理というふうと呼ぶことはほとんどない。医者や総理大臣は、男性がするものだという認識があるからこそ、「例
外」に特別な名前をつけるわけだ。しかし、それだと、オトコは普遍的で、オンナは「オトコではない」というあつか
いをしていることになる。

記号論や社会学では、この場合の「医者」を「無徴（むちょう）」といい、それにたいして「女医」を「有徴（ゆうちょう）」という（有標（ゆうひょう）／無標（むひょう）ともいう）。有徴とは「しるしがついている」ということだ。無徴は「それが標準」だと認識されているため「余分なラベルがついていない」。この有徴と無徴という関係にあることがまさに、多数派と少数派の関係を象徴しているのであり、このような関係を「非対称」であるという。

ふつうと認識されるものには名前がない、特殊だと認識されたものには名前がつけられる。そこで、多数派には名前がない、少数派には名前があるという現象がおきる。少数派の名前がつけられたあとに、少数派が多数派に名前をつけることもある。けれども、その名前を多数派はしらないことがある。「シスジェンダー」や「異性愛」「墨字（すみじ）」「聴者」「晴眼者（せいがんしゃ）」などがそれにあたる。

シスジェンダー ↔ トランスジェンダー
異性愛 ↔ バイセクシュアル、同性愛
墨字 ↔ 点字
聴者 ↔ ろう者、難聴者、中途失聴者
晴眼者 ↔ 盲人、弱視者

これらの名前（社会的属性、あるいはカテゴリー）の両方をしらずに「多数派に属するものごと」を「ふつうの○○」と表現してしまうことがある。だれかを他者化し、特殊化し、その一方で自分たちのありかたを普遍化することであるといえる。これでは公平な態度とはいえない。

自分を無色透明の無徴な存在、中立的な立場、あるいは「社会で支配的な価値規範そのもの」としてとらえるのではなく、自分は、ふたつや、みっつ、あるいはそれ以上のなかの「ひとつ」であると、自分を相対化する必要がある。

自分を相対化しなければ、結局のところ、安全なところから「マイノリティ」をならべてあそんでいるにすぎなくなるからだ。他者について考えることは自分について考えることであり、その関係のありかたを考えることである。そこでは自分自身が問われる。自分を問いなおすなかで自分自身のイメージが、ゆらぎ、変化する。ときには、自分が、わからなくなったりすることもあるだろう。そのとき理解しておくべきことは、カテゴリーはどこまでも流動的であり、その境界線はあいまいであるということだ。たとえば、人によっては、自分のセクシュアリティについて、よくわからなくなることがある。それは当然のことなのだ。人間には「必然のすがた」というものはない。ゆらぐのが当然である。

異性愛ってなんだろう

わたしが韓国に留学していたとき、ある文章をよんで、とても刺激をうけた。それは「ある非異性愛者、異性愛を問う」と題する文章だった（ハン2003）。著者のハン・チェユンは異性愛者の意識について、つぎのように論じている。

異性愛者たちが「自分を定義すること」に没頭したりはしないというのは、よくしられた事実だ。そのためわたしたちは、とてもマジメに「異性愛の正確な意味はなんだろう？」と質問をなげかけても、かんたんにこたえをきくことはできない（354ページ）。

その理由は、そもそも自分を「異性愛者」とは意識していないからである。ハンはつぎのように説明する。

まっさきに目につく一番の問題は、異性愛者たちが自分を「異性愛者」と認識するのではなく、「多数」と命名することにだけ慣れているという点だ（同上）。

ほとんどの異性愛者は、自分が「ふつう」で「正常」であると信じてうたがわない。そのため、「自分の存在について説明しなければならぬのは、いつも、社会のマイノリティの役目」になってしまうのだ（同上）。もし多数派である異性愛者のほうが自分のことをうまく説明できるなら、同性愛者は、その異性愛者以外の存在、つまり「非異性愛者」と理解すればすむからである。だが、現実はそうではない。

同性愛とは、なにか。ハン・チェユンは同性愛者の人権運動をしている。その本人が、熱心に活動すればするほど「同性愛者とはだれのことなのか、あいまいになって困惑してしまう」という（354-355ページ）。同性愛とはなにか。ハンは、つぎのようにこたえている。

理論に人間をあてはめるのではなく、人間を観察して理論化するのなら、胸に手をあてて良心的に告白するに、「わたしには、わからない」（355ページ）。

なぜなら、さまざまな人にインタビューをしてみると、「同性愛」といっても、とらえどころがなく、かんたんには規定できないからである。意識や実態が多様だからである。だからハンは「まず、異性愛者に問う」という（354ページ）。ハン是非障害者（健常者）の障害者に対するまなざしを例にあげながら、関係の非対称性をつぎのように指摘する。

非障害者の視点から「障害のある人もいるんだ」とか、異性愛者の視点から「同性愛をする人もいるんだ」という「多様性」は、障害者が「そうね、世の中には障害のない人もいるんだ」といって配慮し、同性愛者が「異性を愛する人も理解してあげよう」と尊重するはなしにおきかえてみると、コメディになる（同上）。

ハンは、重要なことは「われわれにとって、ほんとうに必要なのは「人間とはなにか」についての前提を転換することであり、人間が人間をきちんと尊重するすべをまなぶこと」だという。

大事なことは、この社会にはさまざまな人がいることをきちんと把握したうえで、社会をつくるということだ。

もし、はじめから人間の歩行が両足、あるいは、つえを利用したり、車イスを利用するなど、さまざまな種類の歩行をさすことが前提になっていたとすれば、おそらくこの世のすべての建築設計士たちは…中略…当然のごとく階段以外のものも開発して設計するだろう。…中略…男と女、同性愛と異性愛も、あらためて説明するまでもなく、おなじことである（364ページ）。

いろいろな選択肢があるなかで、ある生活習慣をえらんでいる。そこに優劣をもちこむのではなく、謙虚に自分の立場を相対化することができるようになれば、異性愛中心の文化や制度をかえていくことができるだろう。

「やさしく接しよう」というはなしではない。ごーまんな態度をあらためるべきではないかということだ。

民族ってなんだろう

日本には民族的マイノリティとして、朝鮮人、沖縄人、アイヌ人、さまざまな「外国人」が生活している。それでは、多数派の日本人は、「なにじん（何人）」なのだろうか。「日本人」といえばよいのだろうか。

日本国籍人という軸をつくるとしよう。そのなかには、アイヌ人や沖縄人だけでなく日本国籍の朝鮮人などがふくまれる。「日本国籍をもつひと」という意味での「日本人」と、民族としての「日本人」をおなじく「日本人」と呼称すると、議論が混乱してしまう。そこで、「ヤマト人」や「和人」という名前をあてがうこともできる。しかし、わたしをふくめて、多数派の日本人は「ヤマト人」や「和人」という表現を日常的につかうことは、まったくない。なぜか。それは、「民族」という視点をかかえこむ必要がないからである。端的にいえば、「多数派には名前がない」ということだ。つまり、民族的な多数派は、民族と国籍というカテゴリーを区別しなくても、とくに問題が生じない、なにも問題はないと認識しているのである。

「民族」であるとか「エスニック」というものは、自分たち以外の、なにか「別の人たち」のはなしであると思ってしまうのである。

石川准（いしかわ・じゅん）は『アイデンティティ・ゲーム』でつぎのように説明している。

エスニック・マジョリティの位置に身を置く者がエスニック・アイデンティティを意識する機会はめったにない。少なくとも、それが自分や社会にとってどのような意味を持っているかをありありと実感することはまずないと言っている。ところが、エスニック・マイノリティとして生きるのが日常であるような人となると意識は一変する。本名でいくのか通名で暮らすのかの選択、帰化や同化をどう考えるのか、民族差別にどう対処するのか、エスニシティは否応なくアイデンティティの中心に位置する。エスニック・マイノリティとは、エスニシティに無関心ではいられない状況に身を置く人々の別名であり、エスニック・マジョリティとはエスニシティの社会的機能を意識しないで生活できる人々の別名だと言ってもいい（いしかわ1992:20）。

民族的多数派は、自分の民族性（エスニシティ）について意識していない。その一方で、他者に対しては「民族」というまなざしをむける。その結果、無意識のうちにつぎのように表現（呼称）をつかいかけている。

「にほんじん（日本人）、あいぬみんぞく（アイヌ民族）、つちぞく（ツチ族）」

このようにならべてみると、「じん、みんぞく、ぞく」にはあきらかに序列がある。ツチ族／フツ族などというように、「非先進国」の民族や先住民を「族」と表現することが一般的であり、日本国内の少数民族やヨーロッパの先住民のことは「族」とはよばない。このような序列を設定しているのは、じん（人）＝多数派の日本人である。

うえのような序列をなくすのであれば、すべて「じん（人）」とよぶ必要があるだろう。ヤマト人、アイヌ人、ツチ人といったようにだ。そうしなければ、民族を相対的にとらえることはできない。

現在の社会科学では、民族という概念について議論が発展し、民族というカテゴリーは本質的なものではなく、ゆらぐもの、想像されたもの、社会的につくられるものだとして認識されている。「民族というのは幻想だ」ともいわれる。

ただ、ここで注意しなければならないことがある。民族というカテゴリーから自由でいられるという、「民族フリー」の「日本人」（多数派）の立場から、「民族は幻想だ」ということは、歴史や社会的背景をふまえないまま、安易な発言をしているのかもしれないということだ。

近代社会は、民族的少数派に制度上の差別をつくり、差別的なまなざしをむけてきた。そのなかで、少数派は自分たちの言語や文化を否定的にとらえるようになり、多数派の文化に同化をせまられてきた。

一方、多数派は近代文明をとり入れる過程で自分たちの文化を欧米化させてきた。しかしそれでも、日常生活なかで自分たちの言語や文化をまなび、継承し発展させてきた。日本の学校教育は、ヤマト人のための民族教育をしている。ただそれに気づかないだけである。

アイヌの文化権や言語権（文化や言語を継承する権利）をみとめようとしないうヤマト人が、つまり、この日本社会の現実が、アイヌが「アイヌでいること」をやめさせたり、あるいは「アイヌであること」をたえず意識させつづける、あるいは、意識させつづけながらも、それをかくそうとさせる。アイデンティティは、そもそも自由であるはずである。それにもかかわらず、アイヌや朝鮮人などの少数派は「アイデンティティのジレンマ」においこまれている。

多数派の親と少数派の親をもつこどもは、さらなるジレンマにおいこまれることがある。「おまえは、どっちだ」というまなざしをむけられ、自分自身もそこで葛藤してしまうからである。しかし、「どちらでもある」のではないか。「どちらも大切」といえることが重要なのではないか。

平等な関係をきずきあげていけば、どちらかだけを選択することにはならない。片方の言語や文化だけを継承することにはならない。移民二世の場合も同様である。日本社会で生活していくには日本語が必要である。しかし、親と会話したり、親の家族、コミュニティとつながるためには民族語が必要である。どちらも大切なのだ。

文化の交流がすすみ、さまざまなアイデンティティが交錯する社会では、個々人の生活のなかに複数の文化や言語が共存することになり、複合的なアイデンティティをもつようになる。だれも「一つ」の「なにか」だけにしぼられない社会になる。そのような社会を「多文化社会」ということができる。

単一ではなく、複数である。その「複数」は、共存と対立のはざまにある。その状況を、どのようにとらえるのか。

参考文献

- 石川准（いしかわ・じゅん） 1992 『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』 新評論
石川准 1999 『人はなぜ認められたいのか—アイデンティティ依存の社会学』 旬報社
窪田幸子（くぼた・さちこ）／野林厚志（のむら・あつし）編 2009 『「先住民」とはだれか』 世界思想社
近藤敦（こんどう・あつし）編 2011 『多文化共生政策へのアプローチ』 明石書店
佐藤裕（さとう・ゆたか） 2005 『差別論—偏見理論批判』 明石書店
塩原良和（しおばら・よしかず） 2013 『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』 弘文堂
白石壮一郎（しらいし・そういちろう） 2011 『文化の権利、幸福への権利—人類学から考える』 関西学院大学出版会
すぎむら なおみ 2011 『エッチのまわりにあるもの—保健室の社会学』 解放出版社
田亀源五郎（たがめ・げんごろう） 2015～2017 『弟の夫』（全4巻） 双葉社
鄭映恵（ちよん・よんへ） 2003 「マルチカルチュラルリズムの可能性と困難」 『〈民が代〉斉唱—アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』 岩波書店、199-234
テッサ・モーリス＝スズキ 2013 『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』 平凡社ライブラリー
中村尚弘（なかむら・なおひろ） 2009 『現代のアイヌ文化とは—二風谷アイヌ文化博物館の取り組み』 東京図書出版会
ハン・チュン（한채윤） 2003 「ある非異性愛者、異性愛を問う」 『当代批評』 夏号（22号）、352-365（朝鮮語）
松波めぐみ（まつなみ・めぐみ） 2001 「『障害文化』論が多文化教育に提起するもの」 大阪大学大学院人間科学研究科 修士論文 <http://www.arsvi.com/2000/010300mm.htm>

宮島喬（みやじま・たかし） 2014 『多文化であることとは—新しい市民社会の条件』 岩波書店
森山至貴（もりやま・のりたか） 2017 『LGBTを読みとく—クイア・スタディーズ入門』 ちくま新書
好井裕明（よしい・ひろあき） 編 2016 『排除と差別の社会学 新版』 有斐閣

ポイント解説：

アイヌ：日本政府は、2008年にアイヌ民族を先住民族として公式に認定した。日本は単一民族の国ではないと公式に宣言しているといえる。アイヌに関しては、1997年に廃止された「北海道旧土人保護法」、それにかわって制定、施行された「アイヌ文化振興法」がある。『現代のアイヌ文化とは』（なかむら2009）、『「先住民」とはだれか』（くぼた／のむら編2009）などが参考になる。北海道博物館に詳しい展示がある。2020年に国立アイヌ民族博物館が開館した。それまで民間で運営されていたアイヌ民族博物館をとりこわし、国立の博物館がつくられた。これまでアイヌ民族についての施策は北海道に丸投げされてきたことを考えれば国立の博物館の設立は意義ぶかいといえる。2019年に法律でアイヌを先住民と明記した（いわゆるアイヌ新法）。

LGBT：性的少数者（セクシュアル・マイノリティ）について、最近ではLGBTという用語が普及している。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字である。性的マイノリティのあいだでは、LGBTという用語を積極的につかう人と、つかわない人がいる。たとえば雑誌『現代思想』の「LGBT」特集号が参考になる（2015年10月号）。ちくま新書の『LGBTを読みとく』も入門書／読書案内として最適（もりやま2017）。

おすすめ映画

『あん』。日本の映画では、これ。

『Xメン』シリーズ。特別な能力をもつ「ミュータント」が地球上で差別や迫害の対象になってしまう状況をえがいている。そこでモチーフにされているのは、アメリカにおけるアフリカ系市民の公民権運動、性的マイノリティの権利運動などである。さまざまなマイノリティの視点から「よみとく」ことができる物語になっている。

『サム・サッカー』。ふつうってなんだろう？ 思春期の高校生が大学に進学するまでの悪戦苦闘をえがいている。

『マダム・イン・ニューヨーク』（English Vinglish）。言語を学ぶことをテーマにした映画として最高のもの。

『ベッカムに恋して』。ふたつの文化をいきる移民2世のアイデンティティとジェンダー。

『GO!』。名前とアイデンティティについて。アイデンティティからの自由について。原作の小説もおすすめ。

『マッドマックス 怒りのデス・ロード』。みるしかない。

『キンキー・ブーツ』。ニッチマーケットと消費者のニーズについて。

『グエムル』。ポン・ジュノ監督の名作。『パラサイト』よりもオススメ。

『もし、あなたなら6つの視線』『視線の向こうに』。人権についてのオムニバス映画。韓国の国家人権委員会が制作（内容は監督にまかせて、制作費を助成）。

『リトル・ダンサー』：スティーブン・ダルドリー監督。この監督の映画はどれも名作。

おすすめドラマ：『問題のあるレストラン』『僕らは奇跡でできている』『ER』『コウノドリ』『glee』『僕のいた時間』『グッド・ワイフ』（アメリカのオリジナル版）『グッド・ファイト』『ミセン』

コメントの紹介

授業資料に「マジョリティ自身が問われている」とあったけれど、このマジョリティの自覚が難しいことだと思う。マジョリティ側は、差別はいけないうから自分ではない、とそもそもマジョリティであるという実感が薄い。だからマジョリティであることに気づいても正面から向き合うことは苦しくて、上からの立場でかわいそう、ただの文句だと言ったりヘイトスピーチにつながったりすることもあって、マジョリティもマイノリティもどちらも「こうあるべき」という決まりに縛られているように思う。無意識のマジョリティにどうやったら気づくか、差別ではなく差異として認めあうにはどうしたらいいかを考えていきたい。

…私たち日本人は「ここは日本なのだか日本の文化にあわせたり、日本語を話したりすることが当然」と思うてしまうことが多からずもあると思います。「郷に入っては郷に従え」というようなことばもあるくらいですから。もちろんそれは大事なことです。ただ、母語や文化がその人自身のアイデンティティをつくる要素になっているということを忘れてはならないと感じました。日本から海外へ渡った人々も日本人であることに誇りを持っているはずで。だから、世界各地に日本語新聞のような日本語メディアがあるのではないのでしょうか。自分たちの母語を忘れてはならないという気持ちがあるのではないのでしょうか。それと同じように、外国にルーツをもつ方々は自国の文化や母語を大切にしているはずで。そのことを日本の保育はまだ考慮できていないのかなと思いました。…

…海外移住資料館だよりをいくつか読んでみました。100年以上前に日本からたくさんの方が海外へ移住し、「多文化社会」は最近のものではなく昔から少しずつ形成され、日本が外国に影響を与えていたことが分かりました。ハワイのアロハシャツは、かつての日本人移住者たちが日本から持参した着物を、「もったいない」精神で子供用のシャツに作り替えたことが始まりだそうです。ハワイにはいったことがありませんが、親近感がわいたし、日本の文化が海外に根付いているというのは嬉しいです。

今回の講義を受けて考えたことは日本にいて自分がマイノリティになった時の大変さをなかなか理解できないのだということです。今年の三月に私は留学のためにヨーロッパに行きました。そのころコロナウイルスの流行が大きな問題となってきたころでヨーロッパでアジア人が暴行を受けたなどという暗いニュースを聞く機会もあり家族も非常に心配していました。幸い自分は留学先で差別などを受けることはありませんでしたが、留学先に滞在している間は常に自分がマイノリティな存在であるのだと意識せざるを得ませんでした。この経験はおそらく日本でマジョリティの中で生活している間は理解できなかったことです。…

…私は大学の講義等で日本は単一民族ではないという話を聞くたびに他の都府県ではアイヌについて馴染みがあまりないのかと疑問に思う。私は北海道出身のため、校外学習でアイヌ民族についての展示などを見に行ったりした。このような体験が都府県の方は出来ないにしろ、日本の先住民としてももう少し学ぶ機会があってもいいのではと思った。(元々蝦夷は日本に含まれていないですが…。)

【あべのコメント：北海道のあたり前がもうすこし全国で共有されるといいんですけどね。】

日本では標準語化を進めるために学校で方言札を使っていたと聞いたことがあります。方言を使ってしまった子の首にかける、さらにバトンのような感じで別の子が方言を使ったらその子に渡せるというものと聞いた時、いじめでしかない…と思いました。方言札について論文を調べてみたところ、実際に、方言を使わせるためにイタズラをしたり、見せしめにされたり、教師から体罰を受けることもあったようです(参考：近藤健一郎「近代沖縄における方言札の実態：禁じられた言葉」)。方言札のことを聞いた授業で「標準」を決めることでそこからはみ出るのができてしまうことを習ったので、「数や質ではなく、力関係」ということを表していたのだなと考えました。

現在、排外主義的な人は非常に多いと個人的には感じます。SNSで少したどどしい日本語で自分の意見を表明している人に対して「文法おかしいけどお前ナニ人？」のようなコメントをする人も見たことがあり、特定の国名を出させて叩きたいだけなのだろうなと思いました。災害が起こるなど国内が不安定な情勢になると、外国人や在日朝鮮人などを差別するような発言やデマが増えると言われてるので情報を受け取る際に注意したいと思っています。

【参考文献】

『愛知県立大学文学部論集. 国文学科編』53巻(2005-03) 近藤健一郎「近代沖縄における方言札の実態：禁じられた言葉 (<特集>シンポジウム「はっする言葉」)」

…お互いを認め合うには、コミュニケーションが大切だと思うので、世界共通語として、英語教育にもっと力をいれたら良いのではと思った。

【あべのコメント：英語は「世界共通語」なんですか？なぜ？思いこみではないですか？これも大事な問いのはず。】

私はロックバンドの音楽を普段よく聴くのだが、ロックにも様々なジャンルが存在する。ハードロックやメロコア、ラウドロックなど様々な種類があるが、どれが一番いいのかと考えると、「みんな違ってみんないい」という結論にたどり着く。ジャンルがひとつしかないロックなんてつまらないし、折角色々な音楽があるのだから、色々な音楽を聴けばいいじゃないかと思うのだ。そしてこれは多文化にも同じことが言えると思う。世界には色々な人がいて、肌の色が違う人もいれば話す言葉が違う人もいる。それぞれが育った環境も違えば、当然文化も異なる。ならばそれぞれの価値を認めていくべきではないか。異質集団を排斥しようとする動きに見られるような、均質であることが必ずしも善だとする見方は違うのではないか。折角色々な人が存在するのだから、お互いを認め合えばいいのではないかと考える。コメント

【あべのコメント：よくわかります。細分化されやすい分野ってありますね。「差異化」して、べつの名前をつけて、一つのジャンルを確立する。デスメタル、メロディックデス、シンフォニックメタル…などのように。そうやってコミュニティをつくるわけですね。一方で、メタルミュージックという大きな枠で一体感をもつ場合もある。差異化と同化のはざままで人は生きているわけです。プログレッシブロックは当初は「先鋭的な音楽」をさしていたのに、途中から音楽の「型」になっていきました。革新的になったり保守的になったりするのが人間。わたしはマリリオンやナイトウィッシュというバンドが好きですが、どちらもカテゴリー化するのは無意味というか、バンドとしての音が確立されていて、「ジャンル」にしばられないところに魅力があります。】

…私は所謂オタクと言われる類いの趣味を持っています。漫画を読んだりゲームをやったりするのが好きで二次元キャラクターを好きになって絵を描いたりしています。ですが、できる限りそういう趣味があることを周りに隠そうと思ってしまっています。同じ趣味を持っている人は大抵学校内に一定数いますし、それを考えると数としては多数派では無いにしてそこまで珍しいものでもないと思うのですが、どうしても周りの目が気になって公にはできません。自意識過剰かと言われてしまうかもしれませんが、実際私にそういう趣味があると知らないクラスメイトが、いとこが二次元趣味でフィギュアだらけの部屋が気持ち悪いと言って同意を求めてきましたし、好きなアニメを授業で紹介したクラスメイトが小馬鹿にされているのも目にしました。そうやって二次元オタクを気持ち悪い、理解できないと言うクラスメイトも、鬼滅の刃にハマっていると言ってましたし、授業の発表では好きなアーティストについて熱く語ってたりしました。私には彼らと彼らが気持ち悪いと評するものとの大きな差があまり感じられません。ただそこにあるのは気持ち悪いと言われたか否かの区別だけに見えます。…

【あべのコメント：サッカーのオフサイドトラップのように、どこにいれば安心というものではなく、蔑視されるされないの境界線は、気まぐれなものです。根拠がないわけですからね。逆にいえば、だれにどういわれても、気にすることはない。】

YouTubeライブの後、CiNii Articlesで“多文化社会”や“移民”というキーワードで論文を探してみた。そこで出てきたいくつかの論文を読んで驚いた。なぜなら、「現在日本は多文化社会に移行しつつある。」や、「多文化社会の到来」などと冒頭に書かれた論文がいくつもあったからだ。授業資料で示された安田氏の見解とは真逆のことを言っていたのである。その時私は、「これが大学の勉強なんだな」と思った。先日読んだ池上彰氏の著書『なんのために学ぶのか』では、大学とは「習ったことが全部本当だというそれまでの常識が通用しなくなる世界」だと書かれていた。大学の教材は文科省の検定を受けたものではなく、著者の意見によって内容が大きく変わってくるから、「自ら学び、自ら考える」姿勢が大事だ、と。今回そのことを実感し、スライド資料にあるように身の回りの情報を「疑う」ことを念頭に学習に臨んでいこうと思った。…

…「歴史」について、歴史と歴史学の違いを読んですごく納得した。歴史学は、歴史という事実、出来事の束から重要なことを選び関連づけ意味付け叙述する。教科書を作るときもまたその工程を踏んでいる。だから、歴史のなかに何を求めるかによって、選び出す事実も多様で解釈も様々になり、意図的にある解釈を導き出す可能性もあって、政治的に利用されたりもする。歴史の解釈はたとえば国によって変わったり、政治的背景が絡むことによって変わったりするのはそのためなんだなと思った。

藤井氏の「日本も他者に働きかける主体であり、または相互に影響を及ぼしあう存在」であるという言葉から、先日行われた外国人労働者・難民支援団体STARTと、難民の方の話を聞く会で聞いたことを思い出した。ヨーロッパなどでは「自国で生活できない」という理由で難民申請が通るが、日本では「命の危険があって難民として日本に来た」と言っても申請が通らないこともあり、難民申請認定者は一年の申請者のうちわずか0.4%だと聞いた。出入国在留管理局が難民を受け入れない理由には外国人への偏見があるからだという。授業資料にあったように外国脅威論が根底にある。今年大学に入学して第二外国語のポルトガル語の授業を受けるまで日本が送り出した移民について何も知らなかった私は難民・移民について何も知らない人と大差はないが、日本もかつては移民を送り出した過去があるという意識が浸透していたら、このような事態は起こらないのではないだろうか。移民・難民について義務教育機関にほとんど教えないのはなぜだろう。…

CiNiiで「多文化 医療」と検索してみました。CiNii Booksだと17件ヒットし、一番古いもので2001年のもの、CiNii Articlesだと160件ヒットし、一番古くて1994年のものが見つかりました。多文化・多民族社会の医療現場においても、言語や文化の障壁は重要なテーマであると思います。しかし、戦前から国家間の人々の動きがあった中で、このテーマが議論され始めたのが20世紀末～21世紀初頭と考えると、まだ注目されて間もないように感じました。この点から、移民などへの医療提供に支障を生じさせ、マイノリティが不利益を被る現状が軽視されてきたように考えられます。…

【あべのコメント：以前は「多文化」ではなく、別の用語で議論されていた可能性もありますよね。わたしの本棚にある本でいえば『いのちの差別—外国人労働者の労災・医療』1993年、『多文化の処方箋—外国人の「こころの悩み」にかかわった、ある精神科医の記録』1999年、『在日外国人の医療事情』2003年などがあります。キーワードをかえて、さらに検索してみるといいです。「外国人 医療」とか「在日 医療」「国際化 医療」など。】

…「多文化」「宗教」「ムスリム」というワードを入れ、ciniiで検索したところ沢山の論文が出てきました。その中で気になった「宗教的ニューカマーと地域社会：外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか、三木 英、(2012)」という論文があります。この論文には、ムスリムのモスクが全国のどこにあって、どのような取り組みをしているかについて述べられていました。自分の住んでいる近辺では、名古屋や、自分の住む市にもあると分かり、親近感がわきました。日本の社会において、イスラム教はマイノリティという立場にあります。新聞やテレビなどのメディアで宗教について取り上げ、親しみやすくすればいいのではないかと、思います。

…男女平等を実現するための制度や法律が作られているにも関わらず、なぜ日本では未だに男性優位の考え方が根強く残っているのでしょうか。特に政治や就職の場面では男性優位の考えが強い、重役に女性が少ない気がします。それはまだ「男は仕事、女は家庭」という考え方が抜けないからなのかなと思います。そんな中先日テレビで、日本銀行の理事に初めて女性が就任するというニュースを見ました。女性が社会進出しているという意味では素晴らしいことだと思いますが、「初の女性です。」「女性理事」という言葉を聞いて「女性であること」を強調しているように聞こえて少し違和感を感じました。この他にも「女医」「リケジョ」などの言葉にも「女」という言葉が含まれていますが、これらは、女性がやるのは珍しいから、普通男性がやるから、という考えが背景にあるからなんじゃないかと思います。男女平等は、やりたいことができる、努力し結果を出した分認められる、という面で機会や基準が平等であることが大切だと思います。その意味で男女の力関係の差がなくなればいいと思いました。これは決して女性を優遇するべきだと言っているわけではありません。最近女性差別に対して男性差別も問題視されているそうです。私が言いたいのは何かの判断基準に「男性だから、女性だから」という事を含めるべきではないという事です。

配信を見ていてちょっと気になったので、私が住む自治体+多文化で検索してみたところ、多文化共生事業として日本語教室や日本語スピーチコンテストをやっているようでした。生まれてからずっと住んでいるのに全然知らなかったです。こういうふうにはきっかけがないと知ることができないものってすごく多いので、普段の生活でもちょっと気をつけてみたいなと思います。Ciniiでは多文化+日本語で検索しましたが、日本語教育とか日本語学習といったことばが題に含まれるものがたくさん出てきました。私の住む自治体でも日本語教室がひらかれているように、多文化社会において言語というのは大きなテーマなのかなと思います。

…差別問題といわれると日本のものが真っ先に思い浮かぶ人は少ないかと思いますが、私は、インドのカースト制度を思い浮かべました。しかし、日本人である私が日本の差別よりほかの国のものの方が馴染み深いなんて変な話であると感じます。日本の歴史をもう一度学ぶ機会があるなら、中学校や高校であまり深く説明されることのなかった差別の歴史を勉強してみたいと思いました。

Googleでなんとなく今コロナで大変な時期であるし、「多文化 コロナ」と調べてみました。すると、厚生労働省のホームページに掲載されているコロナ関係のQ&Aをやさしい日本語で書き直した法務省のページが検索結果にでてきました。読んでみると文字が少ないのでどんどん読むことができ、ワクチンのために100億円が出されていて、東大や阪大、国立感染症研究所で研究が進められているという新しい情報まで手に入れることができました。逆に厚生労働省のもののページを見てみると文が長すぎて読むのが大変だし、薬の効能の紹介ではやさしい日本語版だとどんな薬か2文程度で書いてあってすぐにわかったのに対し、もとの文は15行くらいありさらに難しい言葉が多く理解が難しかったです。以前別の授業でやさしい日本語について学び、やさしい日本語で書かれたあるパンフレットを読んだときに逆にちょっとわかりにくいなと思ったのですが、コロナに関するものはやさしい日本語の方が私にあっていて驚きました。やさしい日本語とは外国人のためのものだと考えていたけれど、日本語に慣れ親しんだ自分も助かるものなのだと発見しました。やさしい日本語版のQ&Aは外国人生活支援ポータルサイトというところに載っていて外国人用のものだとわかります。しかし、私のように日本語を話せる人にとっても、さらに日本語が苦手な人にとって必要な情報です。やさしい日本語が必要なのは外国人だという先入観を捨て、厚生労働省のページにもこれを記載すべきだと思います。多文化共生とは日本の文化と外国の文化の共生という考え方だけではなく、いろいろな人がいて、全ての人を社会が受け入れるという捉え方も必要だと実感しました。

今回PCでレジュメを読むのがなんだか疲れてしまい初めてスマホに電子書籍版のレジュメを入れてみた。画面が小さくてこれはこれで疲れるのではないかと思ったが、意外に文字も大きく読みやすく、結果としてかなり使いやすかった。しかしこれはPCで見るPDFと比べた上での結果であり紙の本と比べたら私個人としては圧倒的に紙の本の方が好みだ。また、PCを使っていると家族から勉強していると認識してもらえるが、スマホを使っていると遊んでいると思われるのが難点。私もそうなのだが、母は時折考え方が古いというか、凝り固まっているとまではいかないが…

…私は日本語教員課程の授業をいくつか取っていて、この授業のコメントにもあったが、なかには小学校や中学校のときに外国人の児童が多くいたとか、そういう子たちのための日本語教室が学校内で開かれていたとか、そういう経験をしたことがある人もいたのだが、それはたまたまそういう地域で生活しているとか偶然のものであって、私には日本語教室とかそういうものに対するイメージがあまりないのだが、そういうのに飛び込んでいくにはどうしたらいいのだろうと思う。今回の授業で移民というものには日本に入って来た移民はもちろん、日本から出て行った移民もいるとのことだが、日本にいる以上入って来たものに気が回るけど、出て行ったものには目が行かないので、それらに意識を向けるにはどういう経験をすればいいのだろうと思う。やはり、強く意識しておくことしかできないのだろうか。

【あべのコメント：近所にある国際交流センターに行くといいです。そこで日本語教室も実施している場合がほとんどですし、各地にある日本語教室について多言語で案内掲示しています。名古屋でいえば、あいち国際プラザ、名古屋国際センター。ぎふメディアコスモス（岐阜市立中央図書館）の多文化交流プラザや岡崎市立図書館のりぶら国際交流センターのように、そういったセンターが図書館と併設されている場合もあります。】

私は外国人です。日本に来る前に、日本へのイメージは、ほとんどドラマやアニメから得たのです。ですので、日本に来たらびっくりしたことがたくさんあります。例えば、冬るとき、お湯を飲むではなくで、氷入れたお水を飲むとか。中華料理の天津飯とか、（中国は天津飯という料理はない）。町にゴミ箱は置いていないとか、たくさんの違いがあります。でも今の私は、大部慣れましたけど。一つ気になるのは、たとえ完全に知らない人でも、私は日本人ではないということを一瞬でわかる。何も話さなくてもわかります。顔が違うか、それとも何らかの違いがあるのでしょうか。私自身も同じです、街で歩いたら、人の後影だけを見たら、中国人と日本人の見分けがつかず。それは、いったいどういうことか、私にはわかりません。

【あべのコメント：ゴミ箱は、ほんとに少なくなりました。昔はありました。】

私はLGBTsに関係する映画を見るのが大好きです。そんな作品の中でお気に入りの「リリーのすべて」という作品があります。主人公の男性は、女性用のドレスを着たことで自分の中の女性に気づき、それまで隠されていた本当の自分を探していく。最初は受け入れられなかった妻も、最後には夫を抱きしめて、永遠の友達であると誓います。今では自分がどんなセクシャリティを持っているのか公言しやすくなっています。かつての時代は、ひとりひとりが自分の本当の性について疑う機会すらほとんど無かったと思います。しかし今は色々な概念が生まれ、当たり前女性、男性であることを疑う機会を得ることができます。InstagramやYouTubeでも女性同士、男性同士で恋愛をする人達を確認することが出来ます。…

外国人からの脱出という点について、たくさん思い当たるところがある。自身が日本とフィリピンのハーフであるわけだが、はっきり言って、あまりうれしい記憶が少ない。というのは、幼少期からことあるごとにフィリピン人のハーフであることを引き合いに出された。それもたいていはポジティブな内容ではなかった。私はいつも彼らとなにも違いがないのにと考えていた。日本語で考え、日本語で話す。なんら彼らと発音に差があるわけではない。さらに言えば、彼らよりずっと国語が得意だった。なにがそんなに気に食わなかったのだろうか。仮にも、もし彼らとその国民性だとかを優位に思い誇らしくいるのならそれでいいが、もしも私がアメリカとのハーフでちやほやされることがあれば、やはり私たちは自身の国民性、これを文化として考えたとき、やはり異文化と比較して優劣を決めているのではないかと思う。こうしてアメリカを引き合いに出した私にもやはり異文化に対して優劣を決めつけるという考えが根付いてしまっているのだと思う。それに対してどう向き合うか考え直さないといけな。

「『多文化共生』というスローガンがひろく使用されるようになったのは、1995年の阪神淡路大震災のあとだといわれている。」ということでしたが、なにか当時の日本人にとって「多文化共生」の大切さを痛感させられるような具体的ななきっかけがあったのか疑問に思いました。阪神淡路大震災からの復興のために来日していた海外ボランティアの方々の行動を受けて、当時の日本人は「多文化共生」について考えるようになったのではないかと推測したのですが、実際はどうだったのでしょうか。…

【あべのコメント：神戸についてよく知らないようですね。横浜や神戸は、人の移動という点で日本では重要な拠点でした。神戸には歴史的に、在日外国人がたくさん居住してきた地域です。それを象徴するのは北野異人館や南京町だけではありません。日本初のイスラム寺院といわれる神戸ムスリムモスクもあります。インド人コミュニティもあれば、ベトナム人コミュニティもあります。「FMわいわい」について調べると当時の状況が把握できるでしょう。海外からの救援については、内閣府防災情報のページの「阪神・淡路大震災教訓情報資料集【04】諸外国からの救援」にくわしく説明がありました。 http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/hanshin_awaji/data/detail/1-4-4.html】

…高校2年生の修学旅行で私は長崎へ行き、「発祥の地 長崎と異文化の関わりについて」というテーマでグループ学習を行いました。特に長崎と異文化の関わりを学べた地は、出島とグラバー園です。出島では、出島は「日本にあったヨーロッパ」「ヨーロッパに一番近かった日本」であり、両者にとっても特別な場所であったことを学びました。特に日本にとって、出島は鎖国期間に西洋に唯一開かれた窓口であり海外の情報を知るための政治的な役割を担っていました。私は、今でも長崎で砂糖の文化が栄えた事実を学んだことを覚えています。私は、甘いお菓子が大好きだからです。グラバー園でも西洋料理発祥の地と掲げられており、長崎の街を散策する中で、「バトミントン発祥の地」「ボウリング日本発祥地」というような石碑をたくさん見つけ、今の私たちの生活に当たり前で定着している物の数々はこのように自分の知らないところで過去に人や物の移動が起きた結果であることを学びました。…

日本が、海外から文化の影響を受けるだけの受動態として捉える考え方はその通りに感じた。それはもちろん海外には優れた文化が多くある。それは前回のユニバーサルデザインにも共通して言えることだが、洋式トイレはその例の一つだろう。足腰の悪い人にも使いやすさを提供し、海外の文化を受容している。受容した文化を改良して、利便性を増しているのも事実だ。洋式トイレにはウォシュレットをつけ、非常に便利なものとした。しかし、これを海外には発信していない。当然アジア諸国にはあるが、ヨーロッパなどの遠方には存在しない。実際に今年の2月にヨーロッパに行った際には、隣に洗い流す用の便座が存在していた。もしも日本が海外に向かって文化を積極的に発信していたのなら、ウォシュレットはさらに広い地域に伝わっている文化ではないのかと考える。…

【あべのコメント：便座のとなりにあるのはビデですね。便座とビデという2つの西洋文化を1つにまとめたのがウォシュレットだったといえるでしょう。最初はアメリカで開発されたものようですね。参考：「TOTOトイレ開発100年」が日本人を変えた！いつから座ってお尻を洗うようになったのか <https://toyokeizai.net/articles/-/54722>】

学校のレポートのためにサイニーなどのデータベースはよく使いますが、この論文いいなと思ってもアクセスできず使えないときがあります。他のデータベースから調べても閲覧できなかった場合、その論文を見るのはあきらめて似たものを探したほうがよいのでしょうか。…「どんなかんじかなあ」という絵本をぜひ読んでみてほしいです。その絵本は、障害を考えることがテーマなのですが、「見えないってどんなかんじかなあ」と、色々な人の立場を、想像をめぐらせて経験していく絵本です。同じ物事でも視点を少し変えるだけで見え方は異なるということを学びました。

【あべのコメント：国会図書館の遠隔複写サービスを利用する手もあります。 <https://www.ndl.go.jp/jp/copy/remoted/> 大学図書館が再開したら、大学図書館からも申請できます。有料です。】

私は愛媛県出身で西日本に同和問題が多く残っているらしく、小学校、中学校、高校で学んだ。同和問題の歴史や渋染め一揆、水平社、現代でも差別部落に住んでいるだけで結婚問題、就職問題があることについて学んだ。現代にも同和問題が残っていることに驚いたが都市のようにコミュニティが解体されていない地域では良い伝統の継承もあるが良くないことも継承されやすいのではないかと感じる。反対に都市部ではマイノリティーである外国人が集まったブラジリアンタウンやコリアンタウンなどといった場所で同じような問題が起こっているのではないだろうか。

中学・高校と「部落差別」という名前で何度か授業を受けたことがある。表面的なことだけを扱っていた印象が残っている。そして、高校の時、その授業を受けた後、クラスメイトがこういった内容の授業はやらなくてよいと言っていたことを覚えている。彼は部落差別というものがかつて存在したということを教育してしまうことが怖いと考えていた。その教育さえしてしまわなければ、年月が経てばたつほど、その事実は薄れていく、いつか忘れられる。私もその時は確かに、と納得したが、今考えるとどうだろうか。私は三重県の四日市に住んでいる。四日市公害(四日市ぜんそく)のあった場所である。全国の公害問題は、今までも今後も教育されるだろう。企業が環境を汚していた過去があるから、それによって様々な法律ができた。もし部落差別があったということをこれから教育の場から無くしてしまうと、再び同じことが起きるのではないか。四日市公害など全国の公害問題は教育の場から消えない、しかし部落差別があったことを教育しないと、教育を受けた側は「公害の場所だ」という印象から部落差別と同じ道を辿る危険性があるのではないか。両方を教育することで過去の出来事とその扱い方を学べると考えるようになった。だから私は今部落差別などの教育は無くすべきではないと考える。

【あべのコメント：そうですね。部落差別の歴史や問題について教育しないほうがいいという主張を「寝た子を起こすな」論とありますが、三重県人権センターでは、パネルでつぎのように説明していました。

「私たちは、日常生活で同和問題についての間違っ知識や偏見などに接する機会がないということはありません。」
「差別されても、我慢しなさい。差別をしないでほしいと、声を上げてはいけません。」と言っていることと同じです。」 歴史をなかつたことにすることはできないのですよね。現に差別されつづけている現実があるのに、「みんなでわすれてしまえばいい」というのは暴論です。差別の問題を過小評価する人は、「おわったこと」にしたがる。】

…先生はヘルパーとして障害のある方々に関わっているとお聞きしましたが、介助するのは大人の方が多いのですか。その方々が受けてきた保育、幼児教育や小学校などの教育について当事者の方からお聞きしたことで印象的だったことがあれば知りたいです。

【あべのコメント：60歳前後の人が多いです。なので、当時は「就学免除」といって、重度の障害者は学校に通学「しなくてもよい」という社会だったので、ほとんど学校教育をうけていない人もいます。途中から学校に通ったとか。教育ひとつをとっても、マイノリティは同じような経験をしてきている。先住民(アイヌ民族)、被差別部落出身者、オールドカマーの外国人、障害者、ニューカマーの外国人。これらのマイノリティのなかで不就学を経験した人は多い。もちろん、どの時期に不就学だったかは個別性があります。それぞれ、歴史のある段階で不就学の傾向があった。女性も、大学進学率などは男性よりも低い。非識字者も女性のほうが多い。ニューカマーの不就学は現在進行形の問題。】

今日の配布資料を見て、日本という国は多文化社会からかなり遠い存在にある国家であるということがわかった。過去の歴史を見ても東北の蝦夷、北海道のアイヌ民族、そして沖縄の琉球民族、日本人はこれらの少数民族を侵略、強制的に従わせてから言語を無理やり日本語で統一させるなどの同化政策を行ってきた。これは日本が敗戦する第二次世界大戦まで続くもので、海外だと韓国やシンガポールなどが日本の領土下にあったときに、日本語を覚えさせられている。故に、韓国のご年配の方の中には日本語を話せる人もいと高校の教師に教えられたことがある。…

【あべのコメント：世界の歴史をみても、日本だけが特異なわけではないです。だから問題ではないという意味ではなく、世界の潮流として、近代とは異なる社会をつくらうとしているのが現代です。「なんとなくそんな感じだ」という印象論で満足するのではなく、じっさいどうなのかを把握しようとする姿勢が必要です。】

自分は一年間香港に住んでいた事があります。現地には多くの日本食レストランや日本にもあるショッピングモールがあって、さらには日本語の本だけを扱っている古本屋や日本のお菓子とおもちゃが店の商品の大半を占めているおもちゃ屋、10ドルショップ(日本でいうところの百円ショップ)なんかもあり、日本の文化が強く浸透していることが感じられました。この経験から、自分は他国に文化を持ち込んで影響を与える主体としての日本を知っているので藤井氏と言う相互に影響を及ぼしあう存在という言葉が容易に理解し納得することができました。

…以前、友人と話をしているとき、友人が私の言葉を取り上げて「関西人はそういう言葉使うよね」という発言をしました。私は名古屋生まれの名古屋育ちで関西出身ではなかったのが最初は戸惑いましたが、後から考えると祖母の実家が和歌山県なのでおばあちゃんから移ったのだと思います。この出来事があった後、改めて関西人とは誰のことを指すのだろうか、和歌山県は関西なのだろうかなどと疑問を持ちました。調べてみると、すべてがはっきりと定義されておらず曖昧な線引きであることが分かりました。「県民性」という言葉で日本に住んでいる人を県を境に区切って分けてしまうと、人を一人一人見ることが出来なくなり同じ県にすんでいる人みんなを均一化してしまうのではないかと思います。また、「〇〇県民はこんな人」という言葉を聞いたその県民の人の中には「そうなのか、そうしなくちゃ」と自らイメージに合わせていく人もいるのではないかと思います。人の出生にはさまざまなルーツがあり、生まれてから地方を転々としてきた人もたくさんいます。行政上分かりやすい分け方ではあると思うし、悪いことだとは言いませんが、今その土地に住んでいるからといって県を境に人々をひとくくりにする考え方に疑問を持ちました。

私はCiNiiで多文化の論文を調べてみました。「多文化」というキーワードで検索した結果、1980年代ごろから議論されていることがわかりました。そこで私は次に「多文化理解」や「多文化共生」というキーワードで調べてみました。すると、1990年代後半から議論され始めていることがわかりました。そして2000年に入ってからますます多くの人がこれらについて議論していることがわかりました。多文化という事は1980年代頃から議論はされているけどその当時はあまり多文化と共生していこう、多文化を理解しようとした人は少なかったのではないかと思います。どうしてこのような時期に差があるのかを自分なりに考えてみました。それは「多文化」というものを考えるきっかけが1980年代にはあまりなかったのではないかと考えました。…

【あべのコメント：以前は「国際化」という用語が流行していたんですよ。それはまさに国を単位にした視点だった。】

サイニーで「移民」「日本」で調べたところ、洪 秀賢の‘外国人住民のメディア利用から見る地方コミュニケーションの課題’という論文が気になったので読んでみた。この論文では、日本の鳥取県に移住している外国人を対象として外国人の使用しているメディアの情報から日本人とのコミュニケーションの課題を探すというものだ。私が特に気になった内容は、外国人は母国のメディアから情報を得ており、これにより彼らは日本に馴染むことはできないと記してあった。この論文の内容は大体私の意見と一致していたのですが、1つ意見が違うと思う点があった。それは外国人は日本人（近所の人）と仲良くなりたいたいと思っているがその機会がないという点だ。しかし、母国のメディアを使っているという時点で私は日本に馴染む機会を外国人自らが無くしていると思うのだ。確かに日本人も今よりも積極的に外国人を受け入れる意識が必要だと思うが、外国人も日本人の真似をするというよりは自分の国民性を理解しつつ日本の文化に馴染む必要があると思う。仲良くなりたいたいという気持ちがあるのであれば自分で努力する必要がある。それがお互い国民性を尊重しながら生活する方法だと思う。

引用.参考文献

洪 秀賢,2020,外国人住民のメディア利用から見る地方コミュニケーションの課題

【あべのコメント：異言語のメディアなんて、ずっと見ていられるものではないですよ。わたしは韓国に留学していたとき、なるべくたくさん韓国の本を読もうとしましたが、時間がかかるし、わからない単語もでてくるし、大変でした。言語のちがいで、そんなに楽にこえられるハードルではないです。字幕なしで外国映画やニュースを見てみるとわかるかと思います。】

「多文化共生」という言葉に、私は研究各論（ロシア研究）で取り上げられていた問題を真っ先に思い出しました。それは、日本人の考える多文化共生にはロシアが入っていないことです。私は多文化共生に入っていない国なんて今時あるのかと驚きましたが理由を聞いたら納得しました。それは、私たち日本人とロシアの持っている常識が異なるため、彼らの考え方が理解できていないことです。…

【あべのコメント：大事なポイントですね。ロシアも隣国なのに、あまり日本の隣人とは意識されていない。サイニーで「多文化 ロシア」と検索しても、あまり在日ロシア人についての文献はでてこない。ただ、日本の日本海側や北海道に行ってみれば、案内表示にはロシア語も掲示されていますよ。】

まさに母方のおじいちゃん・おばあちゃんがブラジルで出稼ぎにいらしたので今回の講義はなんだか身近に感じました。最近では特に、フィリピンやブラジルから出稼ぎに日本にきている人たちが増えていると思います。…

…他の国に出稼ぎに行くということが現在の豊かな国である日本では考えられないため、この状況が収まったら資料館に行ってその様子を見てみたいと思った。…

【あべのコメント：日本は物価が安い状態がずっとつづいていて、要するにそれは賃金が低いままだからですが、「外国への出稼ぎ」がいつまでも「考えられない」かどうか。今後、能力のある人は外国に行くことが増えるでしょう。】

日本だけでも文化はそれぞれ地域単位(ひょっとするともっと細分化されるかも)で存在していて、この手の話を聞くと、私はまず「方言」を想起します。日本国内にしながら度々日本人同士なのに理解できないことがある、同じ県内ですら違う場合があります。例えば、「昼休み」「昼放課」私は西三河の人間で「昼放課」が愛知県特有のものと思っていましたが、大学に入ると「昼休み」という言い方が一般になっていました。愛知県のはずなのに言い方が違う、どこの地域から放課を休み時間という意味で使わなくなるのかはわかりませんが、とにかく愛知県内でも言い方が違うのか、と気づきました。Twitterを通して知ったことですが、放課後というと学校終わりを指すようです。しかし、私が小学生のときは、記憶が正しければ、放課後は授業を指すことが多かった気がします。なので、放課後に〇〇へ行こう！という会話を聞くといつも「そんな時間ある？」と思っていました。このように、狭いコミュニティに属していると少数派(「昼休み」を「昼放課」と呼ぶ人たち)が多数派(一般的)であると捉えてしまうことがあるなあと感じました。

【あべのコメント：通じない経験を何度もしたんでしょうね。愛知県出身者が多い県大では「昼放課」で問題ない人が多数派だろうと思います。ただ、他府県出身者は放課後(=下校時間)以外に「放課」という語を使用してこなかったので、愛知でいう「放課」は困惑する用語です。なので他府県出身者がいることを意識して調整しているのでしょうか。】

小・中学生時代を振り返ってみると、ブラジルやフィリピンから家族で出稼ぎに来ている外国人、両親とも日本人だけど小学生までは中国にいた帰国子女とか、わかりやすく「みんなと違う」同級生は何人もいた。だけどそういう国籍みたいなものよりも、人よりちょっと太っている、背が低い、メガネをかけている、知的障がい者クラス、などそういう子の方がからかいやいじめの対象になっていたことを思い出した。そういうものの始まりってプリントの言葉を借りるなら「異質」っていう認識だと思っていて、でも外国人のような「ザ・異質」があまりいじめの対象にならなかったのは少なからず教育の中で「異文化」や「多様性」を受け入れることを教えられていたからなのかなと思う。それらを拒絶することは私たちの中で間違いなく「悪」だった。ただ、今思えばその「多様性」は「外国」に焦点が当てられていて、同じ日本人の中の多様性はあまり含まれていなかったような気がする。(もちろん、道徳の授業や人権週間などといった取り組みはあった。)

…日本ではタトゥーは反社会的なイメージが根強くあり、タトゥーのある人は温泉に入れないルールが存在する。では、外国人で反社会的思想とは無関係の、タトゥーをしている人に日本の温泉のルールを適応すべきなのだろうか。ピアスでも同じことがいえる。魔除けなどの理由で生まれたときからピアスをする風習の国がある。私の幼稚園の同級生にブラジル人の女の子がいたが、彼女がピアスをしていることを日本人の同級生の母親たちが「小さいのにピアスなんてかわいそう。チャラいと思われるじゃない。」と話しているのを聞き、当時はなぜチャラいかわからなかったが、今はなぜ彼女の国の文化を受け入れようとししないのか不思議に思う。

…僕は日本でタトゥーを入れることはあまりにハードルが高すぎるのではないかと感じます。ただタトゥーを入れたい人が、日本社会では主流と対立する事になるから入れづらいという肩身の狭い思いをするのはしょうがないことなのだろうかと考えてしまいます。

日本での“入れ墨文化”と世界で多くみられる“タトゥー文化”は共存することはできないのでしょうか。…「多文化 タトゥー」や、「多文化 入れ墨」というワードでCiNii論文で調べるとほとんどヒットしなかったんですが、「入れ墨」というワードで検索すると『日本の温泉入浴などに関する入れ墨問題』について書かれた論文など複数ヒットしたので読んでみようと思います。

…「難民」が国外に移動する理由に納得できるのですが、ハワイなどへの日本からの「移民」は奴隷かのように扱われたり、カナダなどでも日系人は収容されたりなど、苦しいことの方が多様な気がして、今回調べてみて、なぜ移民になることを選択したのか個人的にあまり腑に落ちなかったです。(移民として成功した人もいるそうですし、まだ私の調べきれいているところがものすごく少ないだけかもしれません。)

【あべのコメント：日本から海外に出稼ぎに行って成金になって帰国した人、日本に送金していた人もたくさんいますよ。わたしの祖父母もそうです。敗戦後の農地改革で土地をとられる程度には成功していた。】

…四日市市役所のホームページを覗いてみると、新型コロナウイルスの特別定額給付金の申請書の記入例が英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語のバージョンでも載っていました。今のこのコロナの状況は、母国とは違う土地で生活する外国人の方々にとって、我々日本人以上に不安である意味災害に近い状況であると感じます。生活がひっ迫している外国人の方が、日本語がわからず申請できないのでは意味がないし、このように市で記入例を公開しているとはとても評価できることだと感じました。阪神淡路大震災が一つの契機として多文化共生の在り方が問われ始めたという説明がありました。現在のこのコロナウイルス流行下でも多文化社会の課題(留学生の支援など)が浮き彫りになりました。災害に近いこの状況をどう乗り越えていくのか、多文化共生の視点からも考える必要があると思います。

…新型コロナウイルスによって新たに生まれる社会の動き、というようなことを先生がおっしゃったときに、最近感じたことを思い出しました。手洗い・うがい・マスクをすることは一種の文化なのでは、と感じたことです。とはいっても、マスクはアジア圏の人(特に日本人)がしているイメージがあり、逆にヨーロッパなどは今年の三月にヨーロッパへ行っていた友達もマスクをしている人は少なかった(三月ならばコロナがそこそ話題になってきた頃のはずだが)と言っていたし、マスクをしているイメージもなければそれこそ手洗い・うがいは習慣というものでもないだろうと思います。日本人が神経質なのかもしれませんが、今回のこの新型コロナウイルスの流行によって、もしかしたら世界で少しはこの感染予防が習慣になってくるのではないのでしょうか。もし習慣化はしなくても、今まではマイノリティだったかもしれないマスクをする人々への理解は多少増えるのではないかと思います。これについて興味を持ったのでネットで調べたところ、日本では他の人から拾わない予防のためのマスクが、海外では感染者が他人に移さないためのものであるため、日本人のマスク姿は奇異に見られる、とのこと。しかし、コロナによる自粛が全世界に広がったころ私がネットで見た海外の写真は(どの国かは忘れましたが、おそらくヨーロッパ)9割の人がマスクをしていて驚きました。9割ということは、日本人が考えるような予防のためのマスクが広まっているのだと思い、新型コロナウイルスによる新たな社会の動きを感じました。

【あべのコメント：東アジアのなかでは、日本はマスク使用率が低かったほうです。日本でインフルエンザ予防、花粉症以外の理由でマスクをしていた人がどれだけいましたか？日本をのぞく東アジアではPM2.5などの大気汚染を理由にマスクをしてきた側面もあります。新型コロナウイルスが流行しはじめたころも、東アジアのなかでは日本のマスク使用率は相対的に低かったです。欧米と対比すれば、もちろん話は別です。日本ではN95のような医療用マスクを一般市民がしているということもありませんでした。N95が一般市民に必要であるかどうか、また別の話です。】

今回の授業のフレーズ検索、マイナス検索は初めて知る機能でした。ネット上では真偽がわからない情報や、見る人を不安な気持ちにさせる情報が多くあり、しかも人の不安を煽る見出しは興味を引くので、ついつい見てしまうことがあります。その点でマイナス検索は、自分が正しい情報を得ようとするときに役立つ機能だなと思いました。特に震災の時や、今のような世界が深刻な状況になっているときには、「現状の正しい情報」は必要だけど「根拠のない予測や情報」は人の混乱を招くだけで、それが起こったのが今回のコロナでトイレットペーパーが品薄になったことだと思います。SNSやネットの普及で情報があふれている今、こういった方法で情報の見極めをすることが大切だと思います。

【あべのコメント：こういうときは「買い占め」が非難されがちですが、なるべく外出しないためには買い置きすることが必要なので、一時的に物品が品薄になるのは、それだけ市民が対策をとったということでもあると思います。】

私は高校時代にマレーシアに修学旅行に行っています。マレーシアは多文化共生国家として有名ですが、行って見た感想としても、日本人にはすごく好感的でした。観光客じゃない中国系の人も多く、本当に多文化を感じました。最初は英語で対応しようとしていましたが、道を歩いていると中国語や、知らない言語でしゃべりかけられたりもしました。お店もいろいろな店があって、インド系の人がおおいところなど、場所によっても差がありました。現地の大学生にいろいろ案内してもらおうという企画で日本語がペラペラで、マレーシア人は外国人にやさしいよ～と言われました。やはり常に多くの民族がいるので対応には慣れているのだなあと感じました。そうして外国人移民などを受け入れているのに歴史的な場所や先住民も多いというマレーシアは多文化社会の鏡だなと感じました。

【あべのコメント：マレーシアには行ったことがありませんが、華人(中国系住民)がたくさんいるので漢語(東南アジアの華人コミュニティでは「華語」という)話者もそれなりにいるわけで、安心して旅行できそうだなと思います。北京官話(Mandarin)にかぎらず、広東語話者も、そのほかの漢語方言の話者もたくさんいるわけですが。】

最近になって、政府が外国人の移民を多く受け入れるようになりましたが、私はあまりその移民の人々の文化を見たことがないような気がします。…

【あべのコメント：日本政府は「移民を多く受け入れ」てなどいません。なにを根拠にそのように感じているのでしょうか。「出稼ぎ労働者」は必要としているが、あくまでも「単身での来日、数年で帰国すること」を条件にした受け入れが基本です。家族に日本人がいる（祖父母や親、配偶者）という条件がなければ、「日本に移民する」のはかなり困難です。留学してそのまま就職する、特定の調理のプロとして招聘（しょうへい）される、介護福祉士の国家試験に合格するなどの回路があるくらい。留学生のアルバイト、技能実習生、日系人など、それぞれ条件がちがうので、体系的に理解する必要があります。日系人も、4世からは条件が厳格化されました。】

「学校文化」と聞いて、中学校の校則を思い出した。私の中学校では、スカート丈は膝下であるのはもちろんのこと、髪ゴムやピンは黒色や茶色のもの、髪の毛を縛るときは耳より下、自分のクラス以外の教室に入ることは禁止、靴下は白色でくるぶし丈は禁止…など、かなり細かく定められた校則が沢山あった。校則を破る生徒も多い中、私は特に深く考えずにただ言われた通りに従ってきたが、今振り返ると、何故ここまでの規則を作るのだらうと思った。「多様性を尊重するためにスカート丈は好きなようにしてもいい！」となるのは少し多様性からズレる気がするが、生まれつきのものを他者に合わせるために無理やり捻じ曲げるのは、クラスや学校の小さな集団の中での多様性を許さないような行為として捉えてしまう。少し前、地毛であるにも関わらず厳しい校則によって無理やり黒色に髪を染められたというニュースを見た。高校でも、もともと髪の毛が茶色い私の友達が先生に問い詰められているのを見た。校則に従うことで協調性や規則を守ることを身につけるのは大事だが、あまりにも行き過ぎたものは個人を気付かせてしまう結果になる。多文化社会である現代だからこそ、生まれつきのものを否定しない校則になってほしいと願う。

男性に対して女性、白人に対して黒人、というように、「Aに対してB」という表現の仕方に違和感を覚えた。自分が何を感じたのかが曖昧で上手く表現できないためもどかしいが、「Uという集合があり、その中にAやBのような部分集合がある」という考え方はできないのだろうか。男性も女性も、白人も黒人も、人間の一部に過ぎない、「相反するもの」と考えるから偏見や差別が生まれるのではないかと思う。この考え方こそ偏見でおかしいかもしれないが…。

【あべのコメント：本来どうあるべきかということと、現に存在している状態は別のことです。非対称な関係性を見いだすことができる以上、その状態を是正するためにこそ、言語化する必要もあるのです。そもそもみんな人類だという視点も必要であるというか、その認識にそう状態にしていくために、マジョリティ/マイノリティという議論がある。】

「多文化 保育」で論文を探し、外国製の子どもたちを含めた保育の現状について調べてみた。まず、保育所保育指針と幼稚園教育要領での外国籍の子どもたちについて書いてあることを調べた。「保育所保育指針」では第2章4保育の実施に関して留意すべき事項(1)オに「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」。「幼稚園教育要領」では、第一章総則第5特別な配慮を必要とする児童への指導の部分に「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の取得に困難のある幼児については、安心して自己発揮できるように配慮するなど個々の幼児の実態に応じ指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。」といった保育が目指されている。しかし現在の保育の現状は、保育者の異文化への理解と知識が不十分、保育方針を柔軟に変えていくような姿勢のなさがあることが分かった。…

【あべのコメント：せめて参照した論文の題を書くこと。「たとえば「」という論文によると」のように。大学ではそれが最低限のルール。】

日系人とその家族が日本へ在留することが認められた入管法について紹介していただきましたが、今回は日系人だけでなく、中国帰国者について興味を持ったので、調べました。まず、中国帰国者とは、1945年の戦争後に中国の東北地方に取り残された日本人のことを言います。…

【あべのコメント：出典を書かずに「調べました」ということはできません。シラバスをよく読むこと。今後は減点します。】

…日本は島国であるがゆえに、海外の人々に比べて、実生活の中で多文化に触れる機会は少ないと思います。…

【あべのコメント：島国なんて、世界にたくさんありますが。海は人の移動や交流をさまたげるものではないし。】

…資料にあるように、マイノリティはマジョリティとの関係においてマイノリティであるのであり、部落差別をする人々がいるから、被差別部落があるという意識が必要だと思います。調べてみると、現在でもネット上で差別する書き込みがあったり、結婚問題に繋がったりすることがあるということでした。もう一度、人権について見直し、差別意識を解消しなければならないと思います。…

…インターネットで部落差別について調べていると、【視点】日本の被差別民——隠れた階級制度 (<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-34918485>) という記事を見つけた。内容は、東京、芝浦の食肉市場で働く人々に対して「狂牛病になった牛を食べたらどうなるかわからないから、食べてみる」という嫌がらせの手紙が届いたというものだった。この市場で働く人々は、世界でも最高級の肉を切り分けているそうだが、そんなことは構いなくこういった食肉処理の仕事に関わる人々は現在でも差別を受けているようだ。どんな仕事だって優劣はないし、その職業に携わる人達がいなかったら色んな物事が成り立たないのに、こややって命を軽く扱って、暴言を浴びせたりする人の心理がよく分からない。…

…私は修学旅行の時、江戸東京博物館に行きました。そこでも国立歴史民俗博物館と同じように「江戸時代日本は本当に鎖国した？」という展示があったのを思い出しました。今となってはもっとその展示をしっかりと見ておけばよかったと後悔するのですが、なんせ小学6年生の私は全く歴史に興味がなかったので…かろうじて思い出せるのは、当時の世界各国と日本の貿易関係を示す矢印の一覧が展示されていたことくらいでしょうか。とてもいろいろな所から日本へと矢印が示されていて、世界各国と貿易をしていたことが分かりました。とても鎖国中とは思えないほど。そのような展示を見た経験もあってかやはり授業プリントにも書いてあったとおり、「鎖国」と断言してしまうのはいけないと思いました。…

私の住んでいる地域では、ブラジルから移住してきた人が多いため、片親が外国国籍なことは勿論、両親が外国国籍の子供も大勢いる。そのため、小学校の教室表示やお便りも日本語とポルトガル語の二か国語で書かれていることが多い。子供たちは日々日本語を学校で習い、吸収していくことが多い反面、両親が日本語を話せない場合が多く、先生とのコミュニケーションが取れないため保護者会も通訳を介して行われる。中学校にも、ポルトガル語と日本語を話せるサポートの先生がおり、まだ日本語が苦手な生徒は、その先生の助けを借りて学生生活を送っていた。…

…わたしはどうしてもマイノリティに属するであろう宗教について考えてしまう。なぜなら私は日本の宗教に対する関心の無さ、偏見に悩まされているからである。わたしはある宗教を信仰している家庭に生まれた。そのため毎日お祈りするのは当たり前でご飯を食べる前も食べ終わった後もお祈りは必ず行うものとして成長した。しかし、学校という社会に出てみるとわたしは少数派で給食の際にお祈りをしようものなら周りから変な目で見られ、笑われた。このたった一度の苦い経験から家以外の場所では周りの子と同じようにふるまった。わたしは多文化社会が広がる日本で少数派であることを恐れてありのままの自分を出すことができない状況が理解できず、日本の宗教観が少しでも変わってほしいと思っている。

【あべのコメント：日本には「宗教嫌悪」とさえいえるような風潮がありますからね。】

私は小さい頃、何かを決めたり選んだりするとき必ず「みんなと同じ」を考える癖がありました。周りの人と少しでも違ったりするとすごく恥ずかしくて、人と合わせることを何よりも重視していました。そんな私に母はよく、「あなたの言う“みんな”って誰？」と聞いてきました。あの頃は聞かれるたびにイライラして、周りの子たちやクラスメートのことに決まってるだろうと思っていましたが、今になって考えると本当に私にとって大切な言葉だったなと思うのです。今回の授業でマイノリティの記述を読んだとき、私は真っ先にこの問いを思い出しました。私が小さい頃必死で合わせようとしていた“みんな”は周りの子たちではなくマジョリティという概念で、母のあの問いは、「誰が決めたかもわからない“普通”に囚われるな」ということだったのだと思うのです。今マイノリティと位置付けられ苦しんでいる人も、マジョリティとして“普通”に生きている人も、母の問いをぶつけられたら一体どう答えるのだろうと今回の授業を受けて思いました。

…資料によると安田敏朗は「外部から攪乱要素が入ってきた、だから対応しなければならぬ」と述べられている。…

【あべのコメント：文脈が読めていません。そんなふうには人の文章を引用すると、悪意ある曲解と判断されます。】

私の住んでいる市はブラジルの方がとても多く、学校には多くのブラジル人のクラスメイトがいました。その時、配布されるものには必ずポルトガル語のものが用意され、テストの用紙にもルビがふられていました。当時、自分の学校は外国人が多く、比較的多文化であるなど感じていましたが、それは自分たちをマジョリティだとし、彼らをマイノリティだと考えていたのだなと気づきました。彼らは私たちとは日本語で会話をし、同じ学校生活をしていたにも関わらず知らないうちに“外国人”という枠を付けていたということに改めて気づきました。しかし、もし彼らを“外国人”という風に全く考えないとすると配布物には配慮されず、彼らの両親は内容を理解できなかつたり、テストにはルビはつかず、学力に差が出てしまつたりと問題は起つてしまうと考えられます。このように考えると様々な文化の違いはあつても不利な状況に置かれないように配慮をするというのがマジョリティの在り方だと思つました。また、平等の定義は多様だと思つますが、マジョリティとマイノリティという関係が存在することで平等が保たれているということもあるのだと感しました。…

【あべのコメント：バイリンガルにならざるをえないのがマイノリティで、日本語だけで社会生活がおくれるのがマジョリティです。なにをどう意識するかという問題というよりも構造的なものです。右利きの人は自分の利き手を意識することがない（日常のなかで自分が右利きだと意識することがない）一方で、左利きの人は自分が左利きだと意識させられる場面が日常的にある。ここに関係の非対称性があり、この非対称性（不平等）を是正する必要があるということ。】

…この講義のプリントについてです。このプリントはあべ先生が作成されたのだと思いますが、気になったのはとてもひらがなが多いことです。他の講義であれば漢字に変換されていると思われる言葉がひらがなで書かれています。例えば、今回のプリントでいうと、「かんたん」、「つぎ」、「おなじ」などです。大学生が読むプリントであるのにどうしてひらがなが多用されているのか不思議です。ひらがなが多用されているからと言って、読みにくいわけではないので困つてはいません。しかし、ひらがなが多用されていることには、あべ先生の深い考えがある気がします。ここからは私の勝手な憶測なのですが、ひらがなを使うことで文章を読みやすくしていると思つます。…

【あべのコメント：簡単は漢語ですが、「つぎ」や「おなじ」は和語です。和語を漢字で書くのは、要するに「あて字」です。いわゆる訓よみの漢字をへらすと、日本語漢字の複雑さが多少ましになるということです。和語を全部かなにすると、今度はひらがなが連続しすぎるので、「書く」「思う」くらいは漢字にしていますが。「初めて」「始める」などと書くのはナンセンスだと思つています。「聞く」「聴く」とかも同様。日本語漢字は、用法が複雑すぎるのです。たとえば「人」という字は組み合わせと文脈で、ものすごくたくさん読みかたがあります。ひとり、ふたり、さんにん、じんせい、ひと、しろうと…。要するに、日本語の文字は、もっと学習しやすい表記にしたほうがいいという考えです。】

…人権問題といえば、例えば誰かが事件を起こしたとき、その人が中国人だから・イスラム教徒だからなど、当人以上までを一緒にたにして悪者扱いにするヘイトスピーチが問題視されています。今でこそ人種差別撤廃条約やヘイトスピーチ解消法などの法的な抑止力が存在しますが、それでもなお、完全にはそういったステレオタイプとも言える批判の声をなくすまでには至っていません。法的措置もさることながら、やはり私は、実際に色んな人とのコミュニケーションをもって、自分の中の偏見や差別(意識的のもでなくとも)を少しでも取り払うべきだと考えます。

これはあくまで自分の周りの経験則なのですが、現実に多国籍の知り合いや友人を持っていると、その人の出身地に対するバイアスは少なからずなくなります(私の場合、ニュージャージー州生まれの年上の男性と面識があつて、その人の影響でアメリカ人に対する意見がちょっと変わりました)。倫理学者のレヴィナス風に表現するなら、自己の外にある「他なるもの」、つまり他者の顔を見ることによって、同化吸収の志向は抑制されるということです。もし仮にヘイトスピーチで「韓国人は悪だ」と吹聴されていたとしても、実際に韓国人の友人を持っている人間であれば、それがあまりにも荒唐無稽な内容であることは直感的に判断できると私は思うのです。このように考えると、今後多文化共生の社会に理解を示していくためには、私たちは色んなバックグラウンドを持つ人間とコミュニケーションをとり、ヘイトスピーチ等人権を侵害しかねない意見に対する反例を体験すべきだと思つました。

…入管法改正についても、外国人を労働力としか見ていないように感じてしまった。外国人と日本との共生を目的とした法なども定めた方がいいと思つた。…

【あべのコメント：そうですね。2019年に制定された日本語教育推進法は、共生を目的とした法律といえそうです。ただ、共生という観点からいえば、日本語が苦手でも社会生活に支障がないようにする政策も必要でしょう。国の法律とは別に、地方自治体が制定した条例には、共生を目的にしたものがたくさんあります。条例に注目するのも大事です。】

…昨今のコロナ禍下における新型コロナウイルス感染者の数を日本や韓国、台湾が欧米諸国と比べて圧倒的に抑えこめている背景として、それらの国は単民族・単言語な社会に近く、欧米諸国に比べて多文化社会ではないからであろう。特に日本では、政府の自粛要請に対して民間の努力があったからこそ感染者をここまで抑え込めたが、それは民族性が統一されていることによる協調が取れたからであろう。EU圏のように国境の壁が元々薄いところや、アメリカのように移民の数が驚異的に多い国では様々な信条・思想を持った人々が住んでおり彼らが協調を取り最適な行動を取ろうとしなかったことが、結果として感染者を一方的に増やしてしまっているのだろう。…

【あべのコメント：韓国には多文化家族支援法がありますが、まあ相対的にはそこまで多民族的ではないといえるとしても、台湾を「単民族・単言語な社会に近く」などと発言すると、台湾人に「なにをいってるの？」と、ぽかんとされますよ。明確な事実誤認です。台湾は「多元文化」をかかげる社会で、多言語が共存しており、それをささえる法律も制定されたところです（国家言語発展法＝それぞれの母語を重視するという内容）。韓国にしても、「単一民族」という固定観念をとりはらおうという議論ができてきている状態。事実誤認による印象論には、なんの意味もありません。】

高年齢者の情報格差について調べてみました。色々な問題点がありましたが一番注目したのは、そもそも利用することを諦めている人がいることです。利用したいけどできないという人をサポートする講座や活動はあるが、そもそも諦めている人はサポートを受けようとしません。僕はこういった現象が日本の同化政策に繋がってしまったのではないかと思います。なぜなら、こういった人がいると社会の政策が進めにくくなってしまうからです。デンマークのキャッシュレス化はその例だと思いました。いろいろなものをオンライン上で行いキャッシュレス化を進めているが、現金をなくすことはできません。その主な原因は、現金を使う高齢者が一定数いることだそうです。逆に言えば、現金を使う人さえいなければ簡単に完全にキャッシュレス化できます。このような「いなければ」と言う考えから、社会を動かしやすくするために他文化を同化させると言う考えが生まれてしまったのだと思いました。現在、不利な人をサポートするための制度や政策はいっぱいあります。しかし、不利な立場であることを経験し、それを解決しようとするのを諦めてしまった人にもう一度解決しようと思わせることも大事だと思いました。